

私の戦争雑感

高橋武紀 鹿沼市

●父母の教え…子と孫達に！

雨の降るなか、防空頭巾を被った私が母に手を引かれ、どこかに逃げています。周りにも多くの人々がいました。雨が滲みこんだ頭巾は冷たく重く…真つ暗な防空壕の中で母に抱かれていました。

昭和20年7月12日午後11時すぎの鹿沼空襲。帝国繊維鹿沼工場(テイセン)のある下府所町、泉町、戸張町、文化橋町あたりが焼夷弾被災。黒川の上空は真つ赤な炎に包まれていたという。大きな防空壕が富士山の麓にあった。

暑い夏の日、手岡(ちようか・旧今市市・父の実家がある)からお昼頃帰ってくると…「戦争に敗けたんだ」と母、姉、兄が泣いていた。自転車のサドルに座布団を巻いたところに乗せられて帰ってきた私は、尻が痛かったことも記憶している。

おじさん(父の兄の息子)の自転車で。私だけがなぜ自転車だったのか、今となっては不明。

私の戦前の記憶は、この2つしかありません。皇紀二六〇〇年(昭和15年)麻苧町に生まれた私は、昭和21年4月、中央小学校に入学しました。

多くの同世代の人も同じだと思うが、生活は苦しく悲しいものでした(同級生の中にはいくぶん裕福な友もいたが)。

私の父は、鹿沼尋常小学校の教員をしていましたが、戦地には行かず、銃後要員として青年学校等で銃剣道訓練も受け持っていたようでした。戦後は現職復帰が適わなかったため、我が家の生活は厳しいものでした。そして「戦争犯罪人の子」と学校の登下校時にいじめられたものです。後年、弱音を吐かない気丈夫な母が、「あの戦争がなければ、お父さんも校長先生(同僚は皆大校長になった)になって、お前も少しは楽だったかもね」と言ったのを思い出します。

しかし、貧しいなかでも父母の生活姿勢や態度のお蔭で、私なりの苦しみ、哀しみ、悔しさはあったけれど、人間として外れることなく普通に育ったと思っています。

今となっては、悲しい思い出でありながら、なぜか懐かしさを覚える子供のころの暮らしと、父母の教えを孫達に伝えたいと思っています。

●食生活

戦後しばらくは、配給制だったので、父母は大変だったと思います。いつも空腹でした。

お米は少なく、麦、サツマイモ、ジャガイモ、カボチャ、トウモロコシ、サツマイモの粉、うどん

粉、ふすま(家で小麦を石臼で挽いた粉の残り)、コッペパンなどを食べました。ご飯は、麦ご飯なら上等で、大根や芋などの混ぜご飯が多く、すいとん(小麦粉団子、野菜類が入った汁物、サツマイモの蔓入りも)、芋、カボチャだけで済ますこともありました。カボチャばかりを食べすぎて手が黄色みを帯びたこともありました。

そんななかでも、母は貴重な砂糖を使い、ジャガイモをつぶして羊羹風にしたり、サツマイモ粉にうどん粉を少し混ぜて黒い饅頭を作ってくれました。本当にまれでしたが、卵かけご飯のときは3人で1個の卵を分け合ったので「あんちゃん、黄身が多い…ずるい、ずるい」などと言い争いしました。イナゴは、貴重なタンパク源でした。今日、屈託なく孫達が洋菓子、饅頭、羊羹などを食べている様子を眺めるとき、母の手作り饅頭を思い出して涙しています。

小さな畑の肥料は人糞でしたから、作業の後の父の臭いは、大変なものでした。その上、尻紙は新聞紙でしたから、紙が何時までも残っていました(父は「新聞は世の中を、人間を良く導くためにあるんだ。そして最後は、人間の悪・汚物を拭ってくれるんだ。汚いなんて言うな」と言っていました)。

●衣類

兄のお下がりでしたが、母が丁寧に継ぎはぎして
くれていました。ある年の学芸会で、いちばん前
で歌を歌うことになり、母は父のズボンを通して
私のズボンを作りましたが、日時がなく不格好な
出来でした。私は「休む、はかない」と駄々をこ
ね、母を困らせました。

でも、お正月には、手編みの手袋、手作りの足
袋、新しい下着など、何か新しい一品を用意して
くれました。「早く来い、来い、お正月」でした。

●住まい

お風呂は、ドラム缶の風呂でした。その後、桶
風呂になりましたが、風呂汲みと風呂炊き、薪割
は、私と兄の交代制でした。風呂汲みは辛かった
が、風呂炊きは、薪を燃やしながらサツマやネギ、
栗、ぎんなんを焼いて食べたので、楽しみでもあ
りました。風呂は兄と2人で入りましたが、早く
出なさい、といつも言われていました。長風呂の
わけは、湯船や洗い場で、将来の夢などを話して
いたからだと言いますが、私が覚えていない
とすると、大した話ではなかったのでしょう。

もちろん子供部屋はなく、食卓折りたたみの
丸ちゃぶ台で勉強しました。照明は60ワットの電球で
した。

●学校生活

教科書、学用品等々、何もかも不足していて、

あっても粗悪品でした。小学校入学の時、学帽と
ランドセルを買ってもらいましたが、粗悪なポー
ル紙と布製ですから、雨に当たらないようにする
のが大変でした。鉛筆、消しゴム、ノートなどギ
リギリまで使いました。補助教材などはありません
でしたから、教科書を暗記するように読み書き
しました。先生方も戦争体験者であったからでし
ょうか、熱心でした。

まだ、今のような学校給食はありませんでした
が、五年生からだったか、お昼に牛乳(脱脂粉乳)
が出る喜びでした。休んだ友の分は、近所の友
がコップに入れた脱脂粉乳牛乳を届けました。で
も、お昼は悲しい時間もありました。ご飯だけで
おかずがないのか隠すように食べる友、そつと教
室を出ていく友がいました：「その思い：ただ、た
だ涙です。そのためか(？)、「今日の給食なんだ
った？」帰ってきた孫に聞きます：最近では孫が
嫌がるので止めました。

お風呂には毎日入れなかったもので、ノミやシラ
ミがいました。学校でも移るので、朝礼時に髪や
背中にDDTをかけられ、顔まで白くなりました。
今にして思うと有害物質ですから、ぞつとします。
中学は、鹿沼市立西中学校でしたが、私の学年
は11クラス(1クラス50〜60人)、高校進学者も
少ない時代でした。三年の二学期、成績優秀だっ

たライバルのK君とSさんの成績が落ちて来ま
した。K君は、富士重工の養成所に、Sさんは准
看護婦の学校に行くことになりました。私も東京
電力か富士重工の養成所(高校卒の資格が与えら
れる)に行く手はずでしたが、M先生と母の強い
進めで宇都宮の高等学校に進学できました。K君
とSさんは、その後、どのような人生を送ってお
られるでしょうか。まだまだ学びたい者が学べな
い時代でした。

●楽しみ

休みの日に、食糧調達のため、父の実家に国鉄
の鹿沼駅から日光線の文挾駅まで列車で行くの
が、待ち遠しかったです。シュウシュウと黒い煙
をあげながら走る蒸気機関車にワクワクしまし
た。ただ、家から鹿沼駅と文挾駅から父の実家の
往復は歩かなければいけないので、辛かった思い
があります(往復15キくらい)。でも、白いご飯、
芋の煮物、卵焼きが食べたかったです。父は、
実家に入る前に鶏小屋に行き、まず生卵を飲みま
した。

遊びは、草野球が盛んでした。道具は布製のグ
ローブでした。ない友は軍手か素手で我慢しまし
た。私は、小さい弟をおんぶして遊んでいました。

お正月には餅をいっぱい食べて：甘み節約の
お汁粉が美味かったな。父は教え子の新年会に

呼ばれ、ご機嫌で土産折を持って帰ってきました。そして歌い、踊りました。

黄金虫は 金持ちだ

金蔵建てた 蔵建てた

飴屋で 水飴買って来た

黄金虫は 金持ちだ

金蔵建てた 蔵建てた

子供に水飴 なめさせた

それからすぐろく、かるたを家族でしました。

この歌は、飲み会・宴会での私のもち歌です。

ドンドン ヒヤララ ドンヒヤララ

ドンドン ヒヤララ ドンヒヤララ

私は、いまでもお祭りが大好きです。おたりや、花市、ぶっつけ祭りなどの縁日には、ときおり50〜100円のお小遣いをもらいました。妹と弟と一緒にの時もありましたから、いちばん安い駄菓子を買っても、私の分がないこともありました。

このような縁日の辻々に戦闘帽を被り、白い着物を着た手足・耳目に障害を負った：足元に缶詰缶などを置いた傷痕軍人さんが悲しそうに立っていました。5円か10円しかあげられませんでした。かわいそうでした。

●父母の教え：子と孫達に

昨年の暮れ、男の孫2人と戦争映画「少年H」を観ました。少年Hの父は言いました。「戦争は

いつか終わる。その時恥ずかしい人になっているな」と。映画鑑賞後、宇都宮市内の食堂での食事中、中一のあるちゃんが、「じいちゃん：今だつて中東、アフリカで戦争があるじゃない。責任取らない恥ずかしい大人が多いじゃない」と言いました。食事中でもあり、「そうだね、これからお互いに勉強していくか」と話をそらしました。これは、人間が欲望という衣を着ている限り解けない、永遠の課題なのかも知れません。彼は戦争終結を全世界的に捉えましたが、映画の父は、太平洋戦争だけを言っていたと思います。彼なりに広く深く考えたのでしょうか。でも、「恥ずかしい人が今、多くいるのでは？」には同感でした。

母がいつも言っていました。「他人の気持ちや態度し、常に惻隱の情を持ちなさい」

四つは、祝祭日には、日の丸を掲げる

つまり戦争をイメージする国旗観を国民国家が早く払拭して「白地に赤く日の丸をめで、ああ美しい日本の旗は」の源に思いを致し、日本人としての人格の自覚をしろ・平和の旗印にしろ

* 父母も私も決して反動的考えの人間ではありません。戦争で尊い命を、今日の私達のために捧げてくれた多くの英霊のためにも、本来の清々として美しい国旗を掲げ、お蔭様で真の旗を掲げられる国になりましたと、ご苦労さまでしたと、安らかにお休み下さいと、感謝したいのです。

この4つの父母からの教えは、娘夫婦、4人の孫らに説教、強要するつもりはないので、折々の会食、孫に毎日遊んでもらっている日々の暮らしの中で、私なりの考え、やり方で伝えていきます。娘の家でも国旗を掲げています。

終わりに、今、世情は混とんとしています。

- 一つは、恥ずかしい人間になるな
- 自覚・責任・思いやりの意味をかみしめろ
- つまり自分をよく見詰め、驕り高ぶるな
- 二つは、自分一人で生きていけ
- つまり最後は自分との戦いだ・自立自尊
- 三つは、お天道様が見ているよ
- つまり自分が恥じることは、するな

正義のある戦争などありません。二度と戦争をしないように祈りましょう。